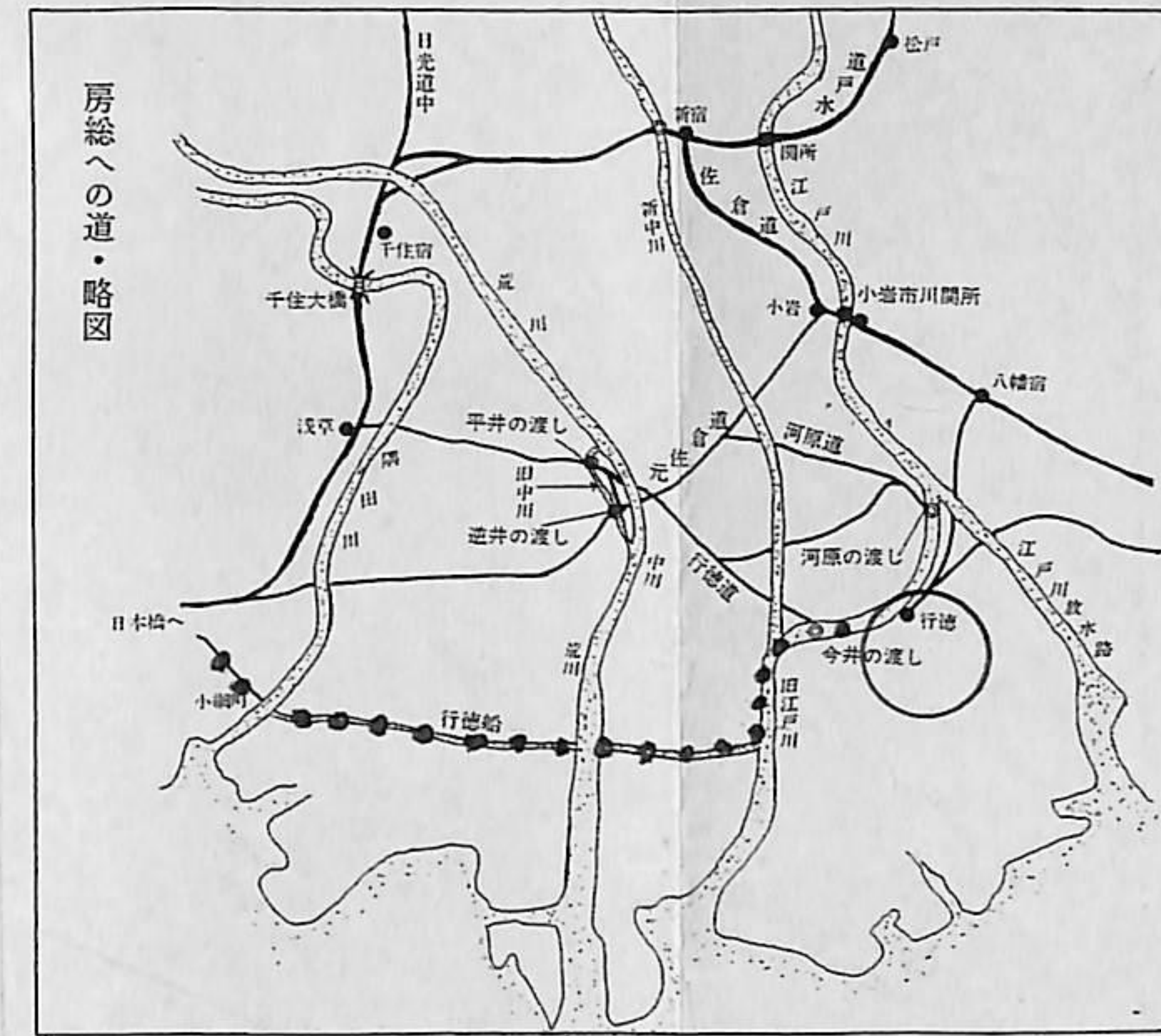
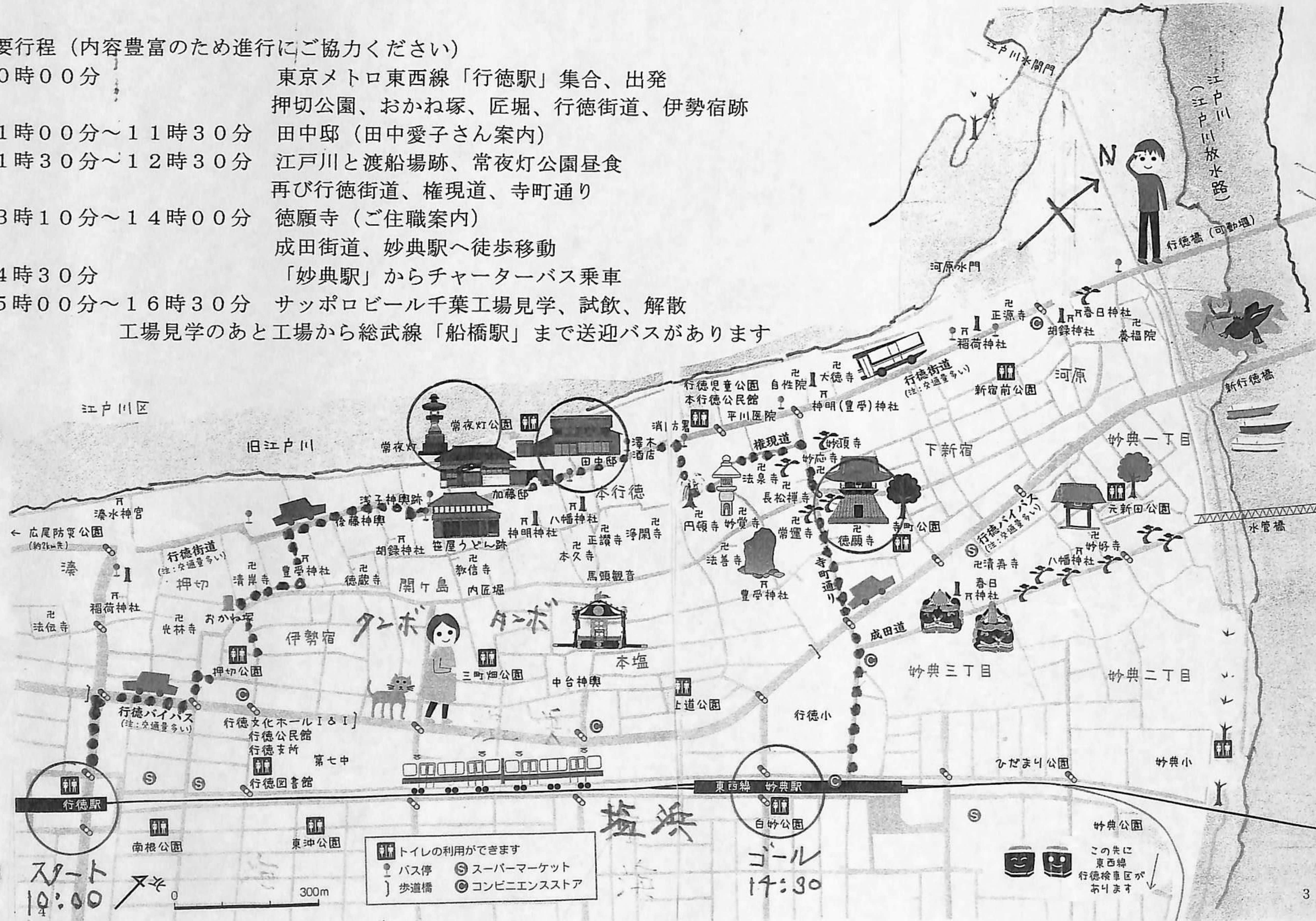


塩と寺の街・行徳と、サッポロビール千葉工場(船橋)見学

山岸弘明

主要行程(内容豊富のため進行にご協力ください)

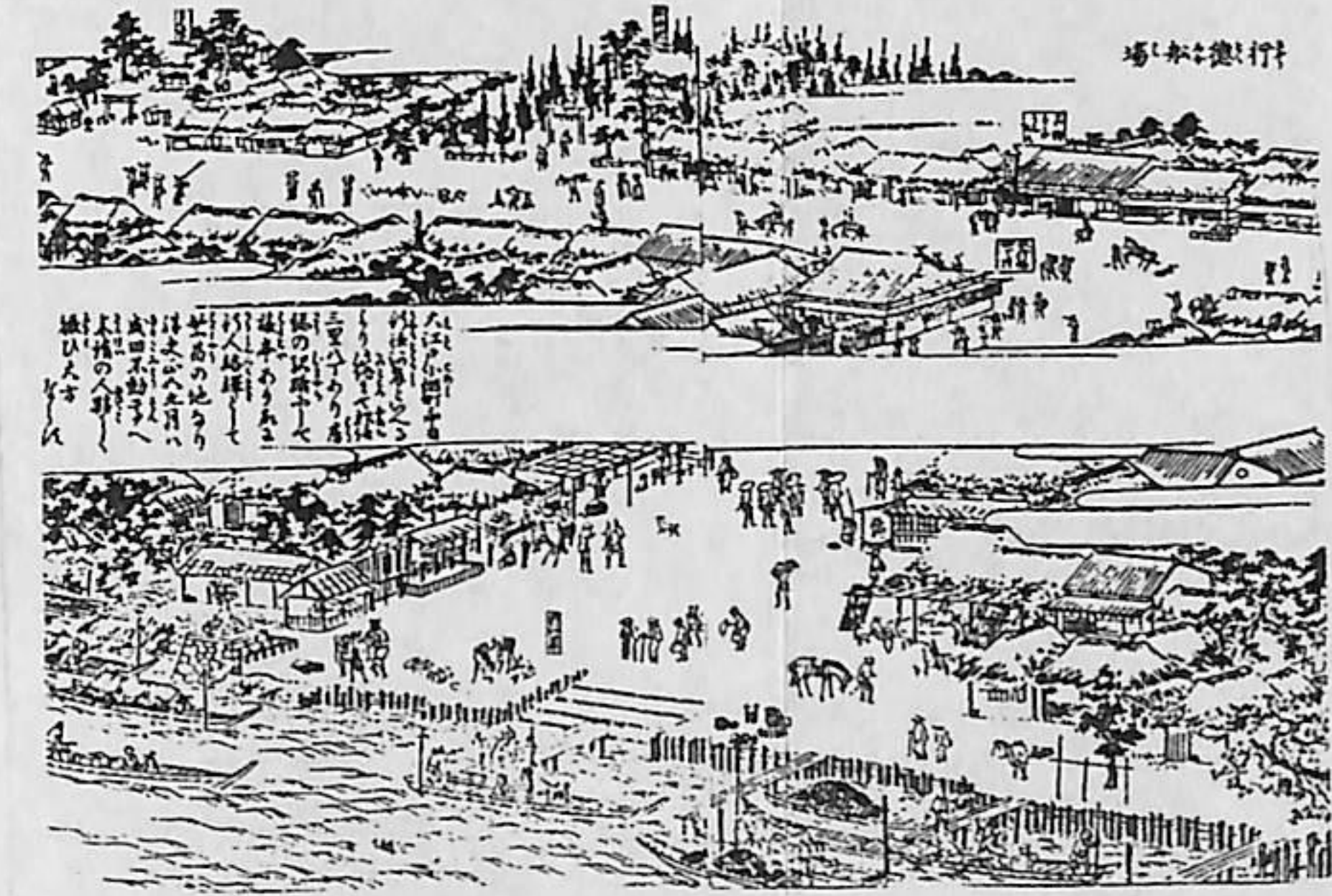
- 10時00分 東京メトロ東西線「行徳駅」集合、出発  
押切公園、おかね塚、匠堀、行徳街道、伊勢宿跡
- 11時00分～11時30分 田中邸(田中愛子さん案内)
- 11時30分～12時30分 江戸川と渡船場跡、常夜灯公園昼食  
再び行徳街道、権現道、寺町通り
- 13時10分～14時00分 徳願寺(ご住職案内)  
成田街道、妙典駅へ徒歩移動
- 14時30分 「妙典駅」からチャーターバス乗車
- 15時00分～16時30分 サッポロビール千葉工場見学、試飲、解散  
工場見学のあと工場から総武線「船橋駅」まで送迎バスがあります



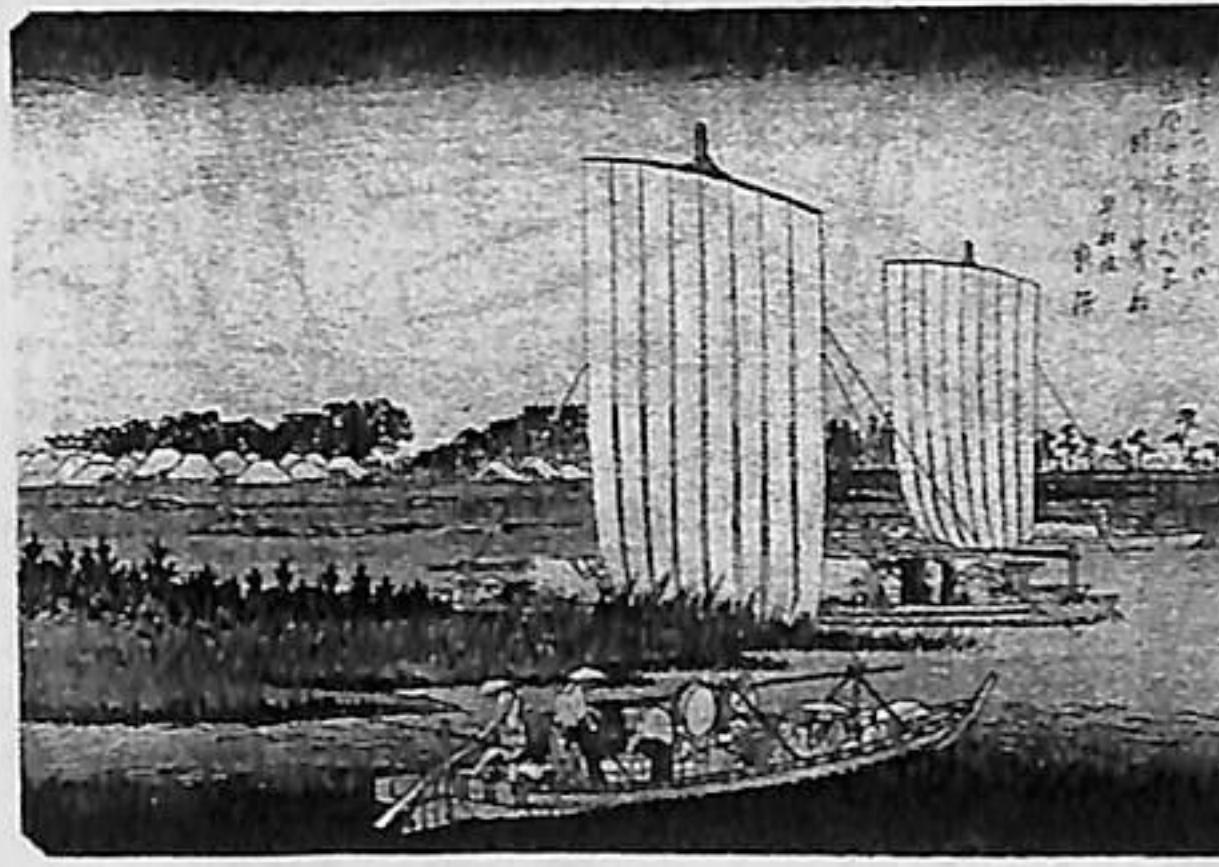
行徳駅前



駅前の観光看板



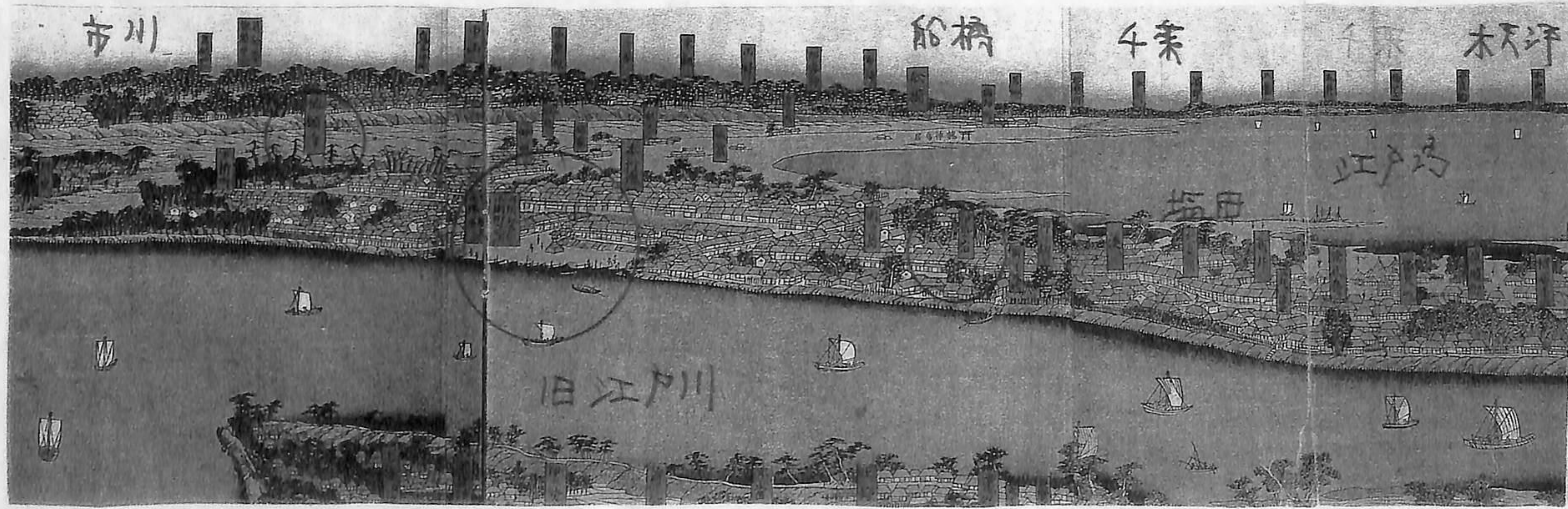
行徳船場(江戸名所図会)



江戸近郊八景「行徳の舟重」

古きよき時代の面影を残しながら都市化が進む塩と寺、水運の「行徳」を歩く

- 1) 「行徳千軒、寺百軒」——「行徳」と「妙典」、駅名も信仰に由来
  - ①行徳さまと行徳＝戦国時代、金海法印という山伏が住み、町の開発と教化に勤めた。法印は「徳」が高く「行ない」が正しかったので人々から「行徳さま」と崇められた。
  - ②妙典＝法華経の妙(たえ)なる經典から
  - ③行徳地区は昔から信仰と深い関係があったといえる。
- 2) 徳川家康が着眼した塩の拠点——製塩と水運の町の誕生
  - ①天正18年江戸入りした徳川家康は行徳の製塩に注目した。大坂にはライバル豊臣家が健在、戦いとなれば西国からの下り塩の供給は絶たれる。地元で大規模な塩作り拠点が必要だったのである。家康は奨励金を出して行徳塩の増産を図り、江戸への輸送を円滑に行なうために運河を開いた。当時の江戸川から新川、小名木川をへて江戸日本橋の行徳河岸に通ずる12kmで、のちこの水路は物だけでなく人の輸送にも使われ、江戸中期に成田山詣でにぎわった。
  - ②「水運と渡船場」は保科講師が担当します。資料②を参照ください。



江戸川放水路コース

江戸川区 行徳通りの図(上の地図とは南北が逆です)



3) 農業と製塩の村——押切公園とおかね塚と匠堀

- ①押切村=江戸川の流れを押し切って流れを変えたことに由来  
江戸時代は幕府直轄領、代官支配で行徳領33か村、塩浜付き16か村の一つ。村高112石余、文化年間の塩浜12町、農業と製塩を生業とした。
- ②伊勢宿村=伊勢の商人がこの地で商いをはじめた  
押切と同じ行徳領、塩浜付き村。村高56石余、家数40軒、塩年貢最盛期15貫文。宿名は行徳間(あい)宿。
- ③両村は明治22年、行徳村、行徳町の大字、昭和30年市川市に編入されその大字となった。
- ④本行徳村=行徳は南北朝に遡る地名で、江戸時代の行徳領は浦安と市川市、船橋市の南部におよんだ。本行徳村は行徳塩田の中心地で最盛期は塩浜37町、塩年貢172貫にも達したが、後期は関西の「下り塩」に押され大正時代水害で消滅した。村の中心は行徳渡船場で江戸小網町の行徳河岸まで海上四里、物資や成田山参詣の旅行者を運んだ。
- ④おかね塚=むかしむかし塩場に使う燃料を運んでいた船頭が吉原の「かね」という女性と親しくなり夫婦の約束をしました。年季があけたかねは船頭を待っていましたが、いくら待っても船頭もが現れることはなく、かねは悲しみの中亡くなりました。これを聞いた遊女たちが供養の碑を建てたとされています。
- ⑤匠堀=農業用水のための水路。鎌ヶ谷市を水源に八幡、行徳をへて浦安に通じた。江戸時代はじめ後出、田中家の先祖、田中重兵衛(内匠)らが築き、500から600町歩の水田を潤した。役割を終えた現在は暗渠となり雨水などの排水路として使われている。

4) 歴史的建造物の続く旧道町並み——枡型が残る行徳街道の間宿(あいじゅく)

- ①江戸から房総へ=江戸時代、江戸から房総への道は  
\*小網町から行徳船で小名木川をへて行徳に渡る  
\*浅草から下平井の渡し、行徳道をへて今井の渡しで行徳に達する  
\*下平井の渡しから旧千葉街道、小岩・市川の関をこえて成田街道へ出る  
\*下平井、河原の渡しを渡って行徳近くへ  
\*逆井の渡し、元佐倉道、小岩・市川にの5通りであった
- ②諸大名の参勤交代は街道保護の幕府方針に沿ってわざわざ千住宿、新宿(にいじゅく)佐倉道、成田街道を迂回した。房総へのルートは多数存在したが旅行者の多くは行徳を基点とした。
- ③行徳街道=通常、行徳から市川八幡までのおよそ7、8kmをいう。一方八幡から鎌ヶ谷、白井、大森をへて外房の木下(きおろし)河岸に通ずる「木下街道」の延長ととらえる考えもある。  
\*五街道以外では場所場所で江戸道、船橋道、木更津道など方向を道名とすることが多く、行徳街道も定説とはいえない

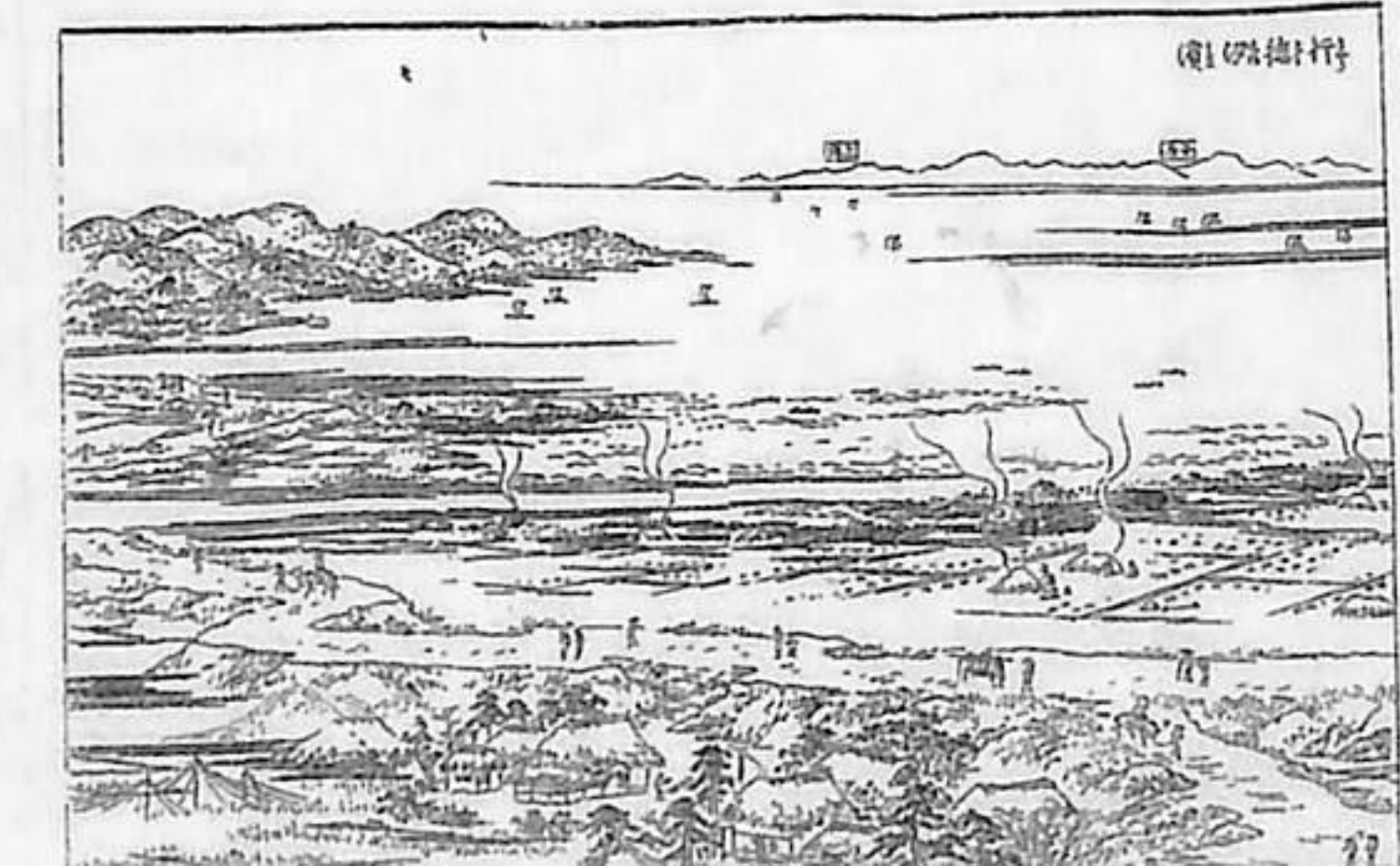


押切公園(昔はたんぼ)



↑おかね塚↓

行徳街道 →



- ④行徳街道の旧道はせまく多人数の案内は危険なためしばらくバイパスを進んでから本道へ。  
昔ながらの古い町並みを楽しみながら一列? 対面交通で進む。
- ⑤伊勢宿=バス停に宿名が残る。
- ⑥枡形(クランク、鉤の手)=城の「枡型」と同じ、虎口に築いて攻守の拠点となる方形の空間のこと。城下や街道主要宿場町では町の入り口、出口の2か所にクランクを築き、前に門をおくこともある。非常時は両口を閉じて町全体を城(本陣)とする。枡形は守備側の集結地となり、敵に攻め込まれた時周囲の家や空き地から射掛ける。敵の見通しを遮断し、また直進させない。
- ④関東入りのころ軍事物資でもある塩作り拠点の家康が築いた防御施設といえる。  
入府直後、武将や代官の陣屋地が置かれた可能性も?
- ⑤後藤みこし店、神子みこし店  
室町時代に始まった行徳のみこし造りは地場産業として発達、全国の神社に納められた。みこしは古くから仏師によって作られたといい、寺の多かったこの地に仏師が住みつき、みこし造りが始まったと考えられている。
- \*史蹟看板=国登録有形文化財 旧浅子神輿店店舗兼母屋  
近世中期から近代にかけて製塩と船運で栄えた本行徳において神輿造りは一つの地場産業でした。この中であって室町時代末期に初代浅子周慶が創業したとされる浅子神輿店は独特な神輿造りで広く受け入れられた老舗でした。  
昭和4年に上棟した店舗は木太く豪快な正面の造り、粋をこらした2階南側の窓縁やひさし屋根の造り、また(みこしは)露盤鳳凰の立体的な躍動感ある造り、屋根の反転曲線や幹反りを古式にした優雅さなどが特徴です。
- ⑥笹屋うどん屋=  
江戸時代から「行徳名物笹屋うどんと中山こんにやく」とうたわれた老舗うどん屋、ちなみに中山法華経寺のこんにやくも製造元は行徳であった。  
行徳にきて立ち寄らない人なかったといわれたほどの繁盛ぶり、十返舎一九も船を待つ間ひと休み「ここはうどんの名所にて往来の人足を止めうどん、そば切りたうべんことをせちに乞いあへれども打つも切るもあるじひとり(中略)御亭主の手打ちのうどん待ちかねていずれも首を長く伸ばせり」と記している。
- \*さあ船が出ますとうどんやへ知らせ  
行徳を下る小舟に干しうどん
- \*安政元年築の建物が現存、内部は非公開、外観のみ見学  
\*治承4年鎌倉めざす源頼朝が立ち寄ってうどんを食べたという伝承が残る
- ⑦加藤邸=明治3年築。元塩問屋の建物。むくり破風造り玄関。ここも内部は非公開。  
説明看板=登録有形文化財 加藤家住宅主屋、煉瓦塀



枡型 ↑

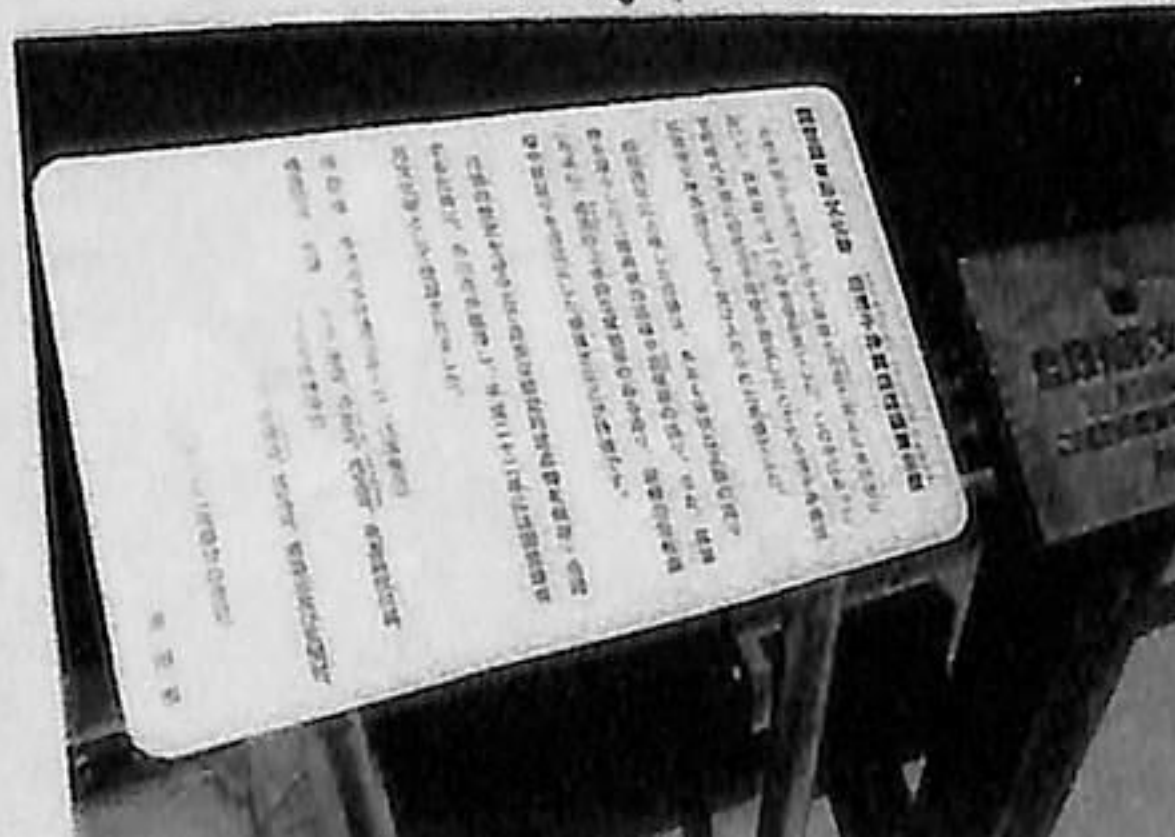
→ 後藤みこし店 ↓



笹屋うどん ↑ 浅子みこし ↓



← 元塩問屋? 加藤家 ↓





- 5) 江戸はじめからショバにかかわり戸長役場や行徳町長を勤めた旧家——田中さんのお宅  
行徳の歴史を研究されている田中愛子さんに町や田中家のことなどのお話を伺います。
- ①江戸時代はじめからショバ（塩場）を所有した旧家で、明治はじめのころ戸長や行徳町公選の初代町長を勤めた。先々代は文化人として知られ福沢諭吉の門下生でもあった。
- ②明治初期建造、近年改修されたが建屋は当時のまま。生活されながら歴史的建造物を保存
- ③格子くぐり戸、上戸、土間、帳場

6) 房総玄関口として栄えた渡船場——旧江戸川と常夜灯公園  
保科講師担当

- 7) 徳川家康が「東金の鷹狩り」にかよった——中世の雰囲気残す権現道
- ①本行徳排水機場  
説明看板＝説明断面図  
本行徳排水機場は本行徳、本塩地区の自然排水がほとんど不可能な低地域を時間雨量50mmまで排水できる施設で水位により自動運転しており、これにより洪水、浸水などの災害を防いでいます。
- ②沢木酒店＝むかしの佇まいを伝えるお店。周辺に旧家や蔵が多い。
- ③再び行徳街道を進み、ほどなく右折して権現道に入る。
- ④権現道＝幅2、3mのくねくねした細道。徳川家康が東金への鷹狩の時利用した道という。行徳街道かできる以前のメイン通りで沿道に寺が並んで行徳「寺の町」らしい佇まいがある。中世の道は自然にまかせた曲折線、近世は直線を意識している。道路の発展過程がみえる。
- ⑤家康は江戸から今井の渡しを利用して行徳に入り、船橋から御成り街道で東金に向かった。  
\*御成り街道は佐倉城主でのちの大老土井利勝がおよそ1か月の突貫工事で作った  
\*鷹狩りは将軍や大名が行なう狩猟のことだが、軍事教練や視察、作戦会議などを兼ねた
- ⑥円頓寺＝日蓮宗。しだれ桜が有名  
妙覚寺＝千葉ではめずらしいキリシタン灯ろう  
法泉寺＝家康が鷹狩りの時に休息した



←旧戸長の家田中家



旧江戸川と名の本塩の江戸川



常夜燈



芭蕉の塚



ちりめん細工の講座も持田中さんの作品

春の恒例行事、行徳札所巡りを主催する「行徳郷土文化懇話会」のメンバーである田中愛子さんのお宅にお邪魔しました。代  
行徳で暮らす田中家は、年代を感じさせ  
重厚な建築物として現存しています。  
札所巡りは昭和59年に第1回が開  
2009年（平成21年）に  
ました。多い時こ  
5しり



権現道

←自宅と町のお話と

- 8) 家康が帰依し一字を貰った「徳願」の寺——寺町通り
- ①長松禅寺＝天文年間、小田原北条氏の家臣松原淡路守が開基。当時このあたりは塩場（塩田）であり、山号の塩場山はこれに由来する。近くに通称「しょぼ寺」の法然寺もある。
- ②徳願寺＝徳川家康のゆかり寺で行徳最大の寺  
特別参観＝ご住職に境内と本堂などをご案内していただきます  
\*浄土宗。山院寺号は海蔵山、普光院、徳願寺  
元は埼玉県鴻巣勝願寺の末寺普光庵であったが、慶長15年徳川家康の帰依で新たに当地に創建、開山を円蒼上人とする。徳川家と勝願寺の一字ずつをとって徳願寺と名付けられた。  
\*3代将軍家光以降歴代将軍家から10石の朱印状を拝領  
\*本堂＝江戸時代の本堂は安政3年火災焼失、大正5年再建、平成3年改修  
山門、鐘楼＝安永4年建立。仁王像は廃仏毀釈により焼失、葛飾八幡宮別当寺から移設  
\*本尊阿弥陀如来＝鎌倉時代北条政子が運慶に彫らせた念持仏といわれる。家康が秀忠夫人お江のため江戸城に移し、逝去後家光から当寺上人が請けて本尊とした  
\*宮本武蔵ゆかり寺といわれ供養塔、書とだまるま絵などを所蔵
- 9) 行徳、成田街道ともお別れ——妙典駅からサッポロビール工場へ
- ①行徳バイパス＝朝歩いた道の続き
- ②直後の左折道が成田街道の旧道。寺や松が続き、旧街道らしい雰囲気があるがご案内はここまで。最寄りの妙典駅をめざす。
- ③旧成田街道はこの先、荒川放水路にぶつかる。当時川はなくそのまま直進して船橋に通じた。  
\*船橋から先は成田街道で佐倉、成田方向へ、御成り街道で東金へ、房総往還は千葉、蘇我、内外房方面に向かった。

以上



江戸川に架かる橋と徳願寺



寺町通り



江戸川水の中



思、出スナ、ア



←3月定例会  
奉立研修会



本寺



→  
4月バズ研  
築橋城と  
太田金山城





### 連田が広がる風景

下妙典一带には、東西線が開通し、土地区画整理事業が始まる昭和50年頃までは、多くの連田や池、ヨシ原がありました。東西線の車窓からは、きれいな蓮花の風景を眺めることができ、蓮根（レンコン）が収穫されていました。現在では大型スーパーやマンションなどが立ち並び、蓮根栽培農家は一軒もなくなりました。



昭和40年代の連田の風景  
(志村電子氏所蔵)



昭和59年の妙典駅付近  
(田所寿志氏所蔵)

平成31年	東武東上線妙典駅開業
30年	市川市人口45万人突破
29年	消費税導入
28年	市川市人口40万人突破
27年	成田国際空港開港
26年	キレイ台風来襲
25年	サンフランシスコ平和条約締結
24年	日本国憲法公布
23年	終戦
22年	本行徳塩焼酎空襲被害
21年	第二次世界大戦開戦
20年	市川市誕生
19年	世界大恐慌
18年	市川市誕生
17年	東武東上線開通
16年	行徳町人口78,006人
15年	東京地下鉄道開通
14年	関東大震災
13年	暴風津波直撃 塩田は壊滅的打撃
12年	総武線開通 (本所・市川・佐倉)
11年	千葉県誕生
10年	日清戦争開戦
9年	戊辰戦争開戦
8年	明治57年

家電が一軒家庭に普及し始める

### 海苔作りの近代化

むかし海苔の収穫は、寒い冬場に海苔採り専用船（べか舟）を操作して素手で摘み取っていました。その後ノリベットと呼ばれる掃除機に似た回転吸入式海苔摘み機や、網の下に潜らせて収穫する高速摘採船が導入され効率化ははかられています。近年では、各工程の機械化が進み、全自動海苔乾燥機では人の手を殆ど必要とせず干し海苔が出来上がるまでになっています。

現在、行徳近郊で採れる海苔は、「行徳海苔」と呼ばれ、生産者が少ないため、あまり市場に出回らない貴重なものになっています。



昭和の天日干し



べか舟で手摘みする様子  
(「日本製品図説」より)

### 海苔づくりの近代化

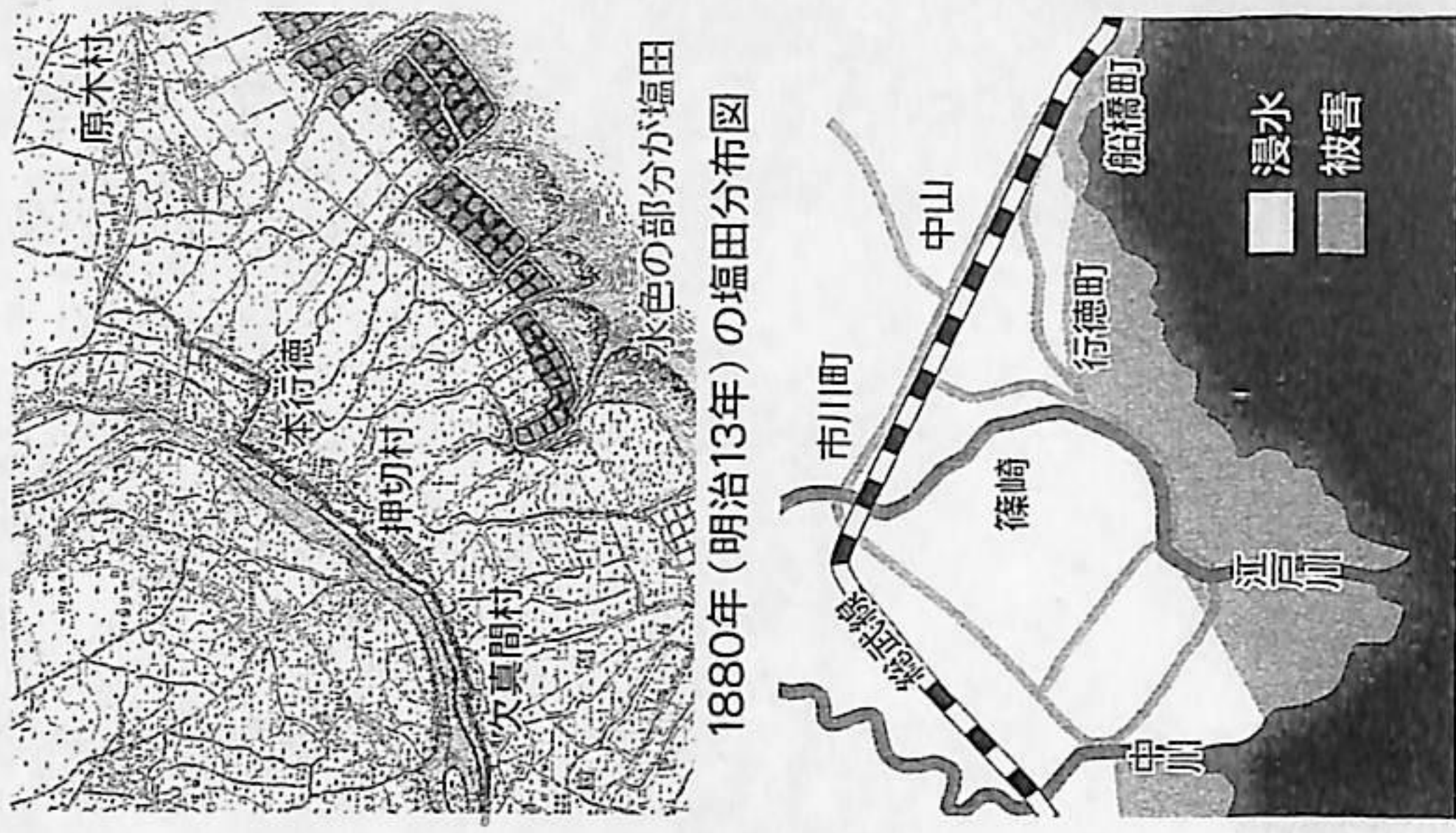


全自動海苔乾燥機



ノリベットによる収穫

※市川歴史博物館には、べか舟をはじめ、行徳で行われていた製塩方法や海苔作りの資料が多く展示されています。



1917年(大正6年)の暴風津波被害図  
出典:上下の図ともに「現見 市川の自然」

1880年(明治13年)の塩田分布図  
水色の部分が塩田

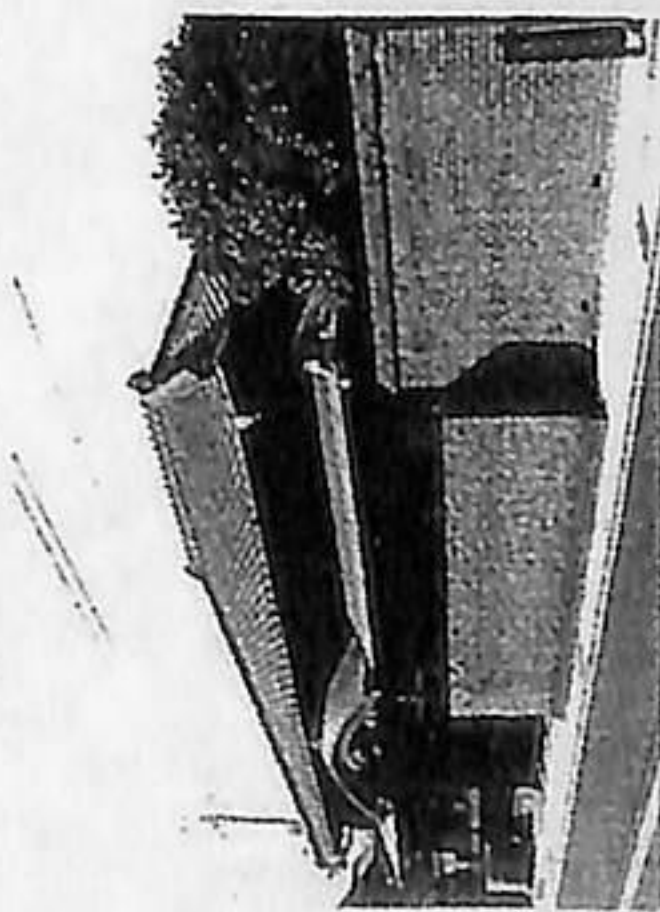
### 塩から海苔へ

海に面した南部の行徳地域では、江戸時代から製塩業が盛んでした。しかしこの地域は、風水害にみまわれる事が多く、1917年(大正6年)の東京湾の暴風津波(総武線のあたりまで浸水被害)により塩田は壊滅的な打撃を受けました。これを機に、明治時代末より副業的に行われていた海苔養殖が本格的なものとなりました。

江戸時代から製塩業が盛んでした。しかしこの地域は、風水害にみまわれる事が多く、1917年(大正6年)の東京湾の暴風津波(総武線のあたりまで浸水被害)により塩田は壊滅的な打撃を受けました。これを機に、明治時代末より副業的に行われていた海苔養殖が本格的なものとなりました。

### 市川市景観賞を受賞した建築物

行徳街道が歴史ある道で、街道として繁栄したことを偲ばせる。



田中邸 (明治初期築)

明治時代には長役場として利用されていた。また、田中家・加藤家はかつて行徳塩田所有者として知られていた。

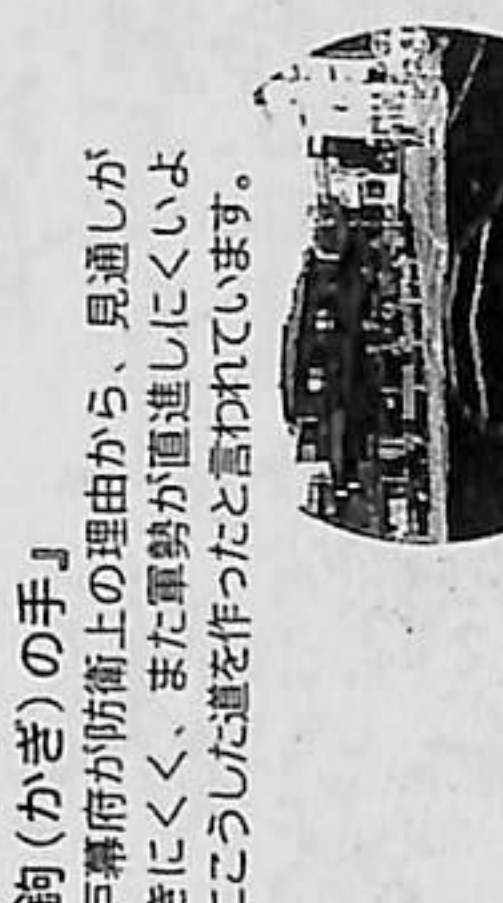


加藤邸 (明治初期築)

(昭和初期築、浅子神輿店と同じ作り)



平川医院 (大正から昭和にかけて築)



「釣(かぎ)の手」  
江戸幕府が防衛上の理由から、見通しがきにくく、また軍勢が通連しにくいようにこじょうした道を作ったと語られています。

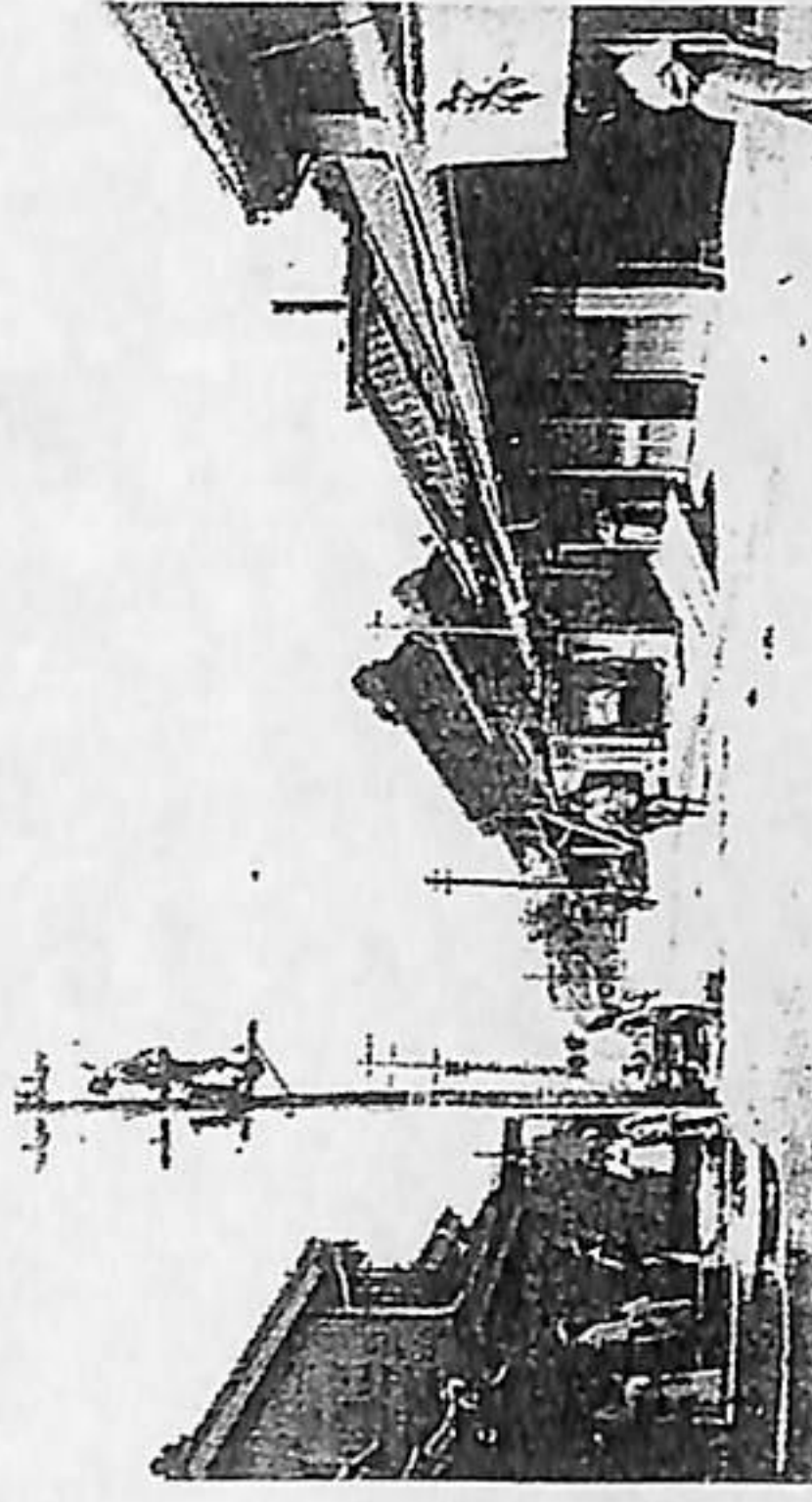
### 笹屋うどん跡

行徳船に乗って来た旅人が行徳新河岸(現、常夜灯公園)で降りて行徳街道に出ると、目の前に笹屋があり、大変繁盛していた。多くの文人墨客も立ち寄りたといわれている。



### 行徳船(ぎょうとくふね)とは

行徳船は船頭1人に24人乗りの手漕ぎ船で、最盛期の1800年代半ばには62艘が通船していたそう。日本橋から行徳までの所要時間は3~6時間、途中下船は不可で、船代は乗合1人につき25文(1810年頃※そば一杯が16文)だったそう。1632年(寛永9年)から始まり、1879年(明治12年)に廃止されました。成田山参詣にはルートがいくつかありましたが、小岩・市川間の関所を通過しやすいため船旅は人気があったといわれています。



大正時代の行徳街道(本行徳公民館付近)

地元民の愛称で、正式名は市川・浦安線、県道六号線。昭和の初め頃までは行徳の市が三、八の日に立ち、古着屋や船屋の露店が並んでいたという。

## 常夜灯周辺をぶらり

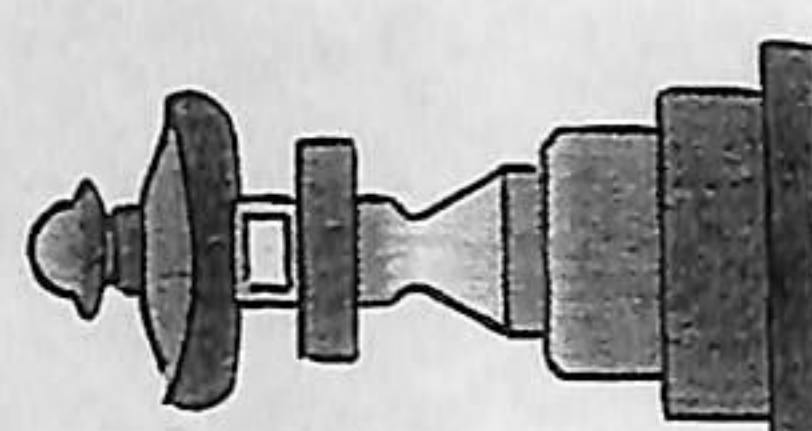


常夜灯 (市指定有形文化財)



林一茶も行徳名物たつたどんを食べ、旅の疲れを癒したかもしれません。散策の足を止め、かつて船に乗り成田山を目指した人々が上陸した場所(行徳新河岸(現、常夜灯公園))で一休みするの、また近くに点在する家々へ足を延ばすのもおすすめです。

行徳駅からまっすぐ押切橋荷神社を右手に見ながら旧江戸川に出て右へ進むと、常夜灯が見えてきます。行徳は江戸時代から塩の産地として有名で、江戸へ塩を運ぶため水運が発達しました。行徳と日本橋小網町の間約12.6kmを往復する船は「行徳船」と呼ばれ、江戸時代には成田山参詣客も利用したことから、船着場はとても賑わっていたそうです。現存している常夜灯は、成田山講中という信者衆により航路の安全祈願のため奉納されたもので「文化9年(1812年)建立」と刻まれています。川と並行して走る行徳街道沿いには、笹屋うどん跡や、塩で財を成した旧家が並び、かつての賑わいを彷彿とさせます。十辺舎一九の『南総紀行旅眼石』には笹屋のことがふれられています。行徳船を利用したと言われる松尾芭蕉や小





# 文化の街かど回遊マップ

## 行徳・妙典地区編



### 行徳・妙典地区の歳時記



十二月・一月  
除夜の鐘（12月）  
初詣（1月）



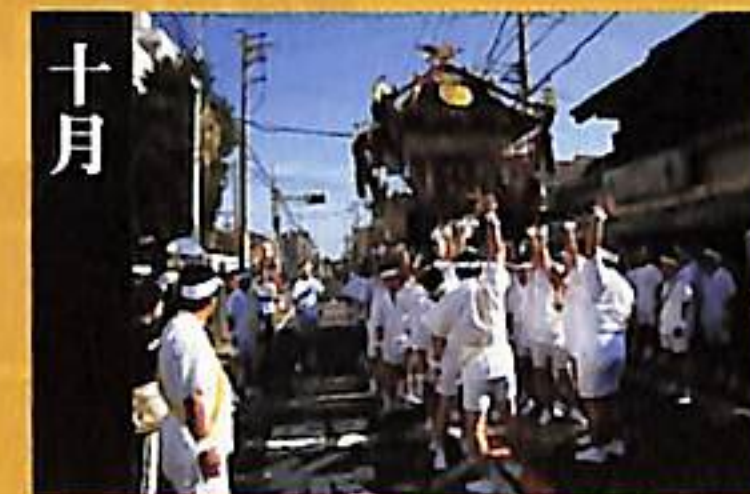
三月  
妙典小学校前の河津桜



四月・五月  
行徳・浦安  
三十三札所巡り



八月・九月  
江戸川ハゼ釣り



十月  
五カ町祭礼



十月  
春日神社祭礼

### 行徳・妙典の祭り

- 神明（豊受）神社祭礼（本行徳1丁目）**  
3年に一度、10月に開催。通称、五カ町祭礼。五カ町とは本行徳1丁目から4丁目までと本塩を合わせた地区。総鎮守とされる神明（豊受）神社を出発し、五カ町を練り歩く。大きな神輿とそのもみ方が特徴。※市川市景観賞受賞
- 春日神社祭礼（妙典3丁目）**  
3年に一度、10月に開催。下妙典の鎮守である春日神社の祭礼で、神輿ではなく雄と雌の獅子頭が担がれることで有名。獅子頭は江戸時代に作られたものである。
- 八幡神社祭礼（妙典1丁目）**  
毎年10月に開催。総重量1トンはあると言われている神輿が特徴。大きくて美しい神輿は、拝殿で披露される。
- 稻荷神社祭礼（下新宿）**  
毎年10月開催。豊作を祈願する祭礼。五カ町祭礼では「下新宿渡御」が行われる。
- 胡録神社祭礼（関ヶ島）**  
3年に一度、10月に開催。古くは雄雌2基の獅子のみの巡行だったが、現在は獅子とともに神輿や山車も練り歩く。
- 豊受神社祭礼（伊勢宿）**  
3年に一度、10月に開催。伊勢宿の鎮守である豊受神社の祭礼。地元の精鋭たちに担がれた神輿が町内を練り歩く。行徳の独特なもみ方が見もの。

#### 行徳・妙典と信仰

「行徳」という地名は、室町時代になって記録上に登場します。また、戦国時代、金海法印という山伏が土地の開墾と人々の教化に勤め「徳」が高く、「行」が正しかったことから、人々から「行徳さま」と崇められたと伝えられています。その後行徳は「戸数千軒、寺百軒」と呼ばれる寺町として発展しました。一方、「妙典」という地名も法華経の経典が日蓮の唱えた「南無妙法蓮華経」のごとく、妙なる経典であるということからついた地名です。「行徳」と「妙典」は遥か中世の時代から、信仰とは切っても切れない関係のようです。

#### 行徳と製塩

行徳といえば塩。その歴史は1000年以上あるといわれ、江戸時代、その製塩業は大きく飛躍することになります。いまも本行徳に残る「権現道」は、江戸時代、徳川家康が船で江戸から東金・船橋に「鷹狩り」に向かう途中、行徳で下船した際に通った道といわれています。その際、家康を大いに喜ばせたのが、海辺に広がる製塩風景でした。当時の様子を伝える文献によると、徳川三代までの将軍が大金を費やして行徳の塩田を保護したこと、三代以後の将軍たちも「御普請」という形で保護を続けたことが記されています。二代目将軍秀忠、三代目家光が投入した額は、それぞれ3千両、2千両といわれていて、現在の価値にすると数億円以上とも！



かつての塩田風景

#### 製塩と水運

江戸時代、幕府による本格的な整備を受け、大規模化した行徳の製塩業は、関東で有数の生産量を誇るまでに成長し、それに伴って、江戸に塩を運搬するための水路が開通します。これにより、行徳から江戸日本橋まで船による塩の大量輸送が可能となりました。この水運はやがて野菜や魚を運ぶようになり、「行徳船」の登場によって、旅人たちも利用する便利な交通路へと進化していったのです。

#### 行徳と川

行徳の西側を流れる旧江戸川。この川は古くからの製塩に始まり、物、人の流通によって、多くの富を行徳にもたらしました。一方で大水による川の氾濫、台風による高潮に悩まされるなど、行徳と旧江戸川は水害との歴史でもありました。今日、旧江戸川沿いを歩くと、大きくそびえ立つ護岸壁に圧倒され、容易に川面を覗き込むことはできません。一見、無機質にも見えてしまうその岸壁も、川と共存してきた行徳の人々の歴史の一部なのです。いまでも、この行徳地域では「江戸川」といえば「旧江戸川」のことを指し、北側を流れる現「江戸川」を「放水路」と呼び区別しています。これも江戸川に対する人々の「想い」の一端ではないでしょうか。



行徳橋と可動堰



常夜灯公園からの旧江戸川の眺め

#### 一 権現道

権現とは徳川家康を指しています。むかし家康が東金で鷹狩をする際、江戸から船で今井の渡し（旧江戸川に架かる今井橋付近）を利用し、行徳を通り船橋へ向かったといわれている道です。現在は道が分断されており、幅2m余の細い道ですが、行徳街道ができる前からある古道で、沿道には多くの寺が並び「寺の町」行徳らしい街並みが今でも残っています。



#### 二 徳願寺

もとは埼玉県にあった勝願寺の末寺でしたが、徳川家康の帰依により、新たに堂宇が建立され、徳川の「徳」と勝願寺の「願」の二字をとって、改めて徳願寺の名がつけられた浄土宗のお寺。行徳札所と呼ばれる「三十三カ所観音霊場」の札所一番にあたります。毎年11月16日（お十夜会）に公開される寺宝「宮本武蔵の達磨の絵と書」や「円山応挙の幽霊画」が有名です。（TEL 047-357-2372）



#### 三 妙頂寺

弘安元年（1278年）日妙上人によって創建され、永禄4年（1561年）日忍上人によって、現在の地に移された日蓮宗のお寺。境内には樹齢200年以上の古木の百日紅（さるすべり）や、江戸時代の寺小屋の存在を偲ばせる筆子塚もあります。また、豊十豊はある釈迦涅槃図（寛保2年（1742年）製作）があり、8月20日の施餓鬼、11月13日のお会式に限って公開されています。（TEL 047-357-2448）



#### 四 妙覚寺

中山法華経寺の末寺で天正14年（1586年）日通上人によって創建された日蓮宗のお寺。境内には東日本ではめずらしい、千葉県で唯一のキリシタン灯笼（織部灯笼）があることで有名です。江戸初期もしくは前期作の灯笼で、中央下部に舟形の中にマントを着たバレン（神父）が靴をはいた姿が彫られています。なお、靴の部分が地中に埋められています。（TEL 047-357-3344）



#### 五 法善寺

慶長5年（1600年）、大坂からきて塩焼を教えたという河本弥左衛門が出家し、宗玄和尚と名乗って創建した浄土真宗のお寺。地元の人からは塩場（しよば）寺と呼ばれています。本堂前の松の木下には、行徳の俳人たちが松尾芭蕉の百回忌に建てた句碑（潮塚）「うたがふな潮の華も浦の春」があることで有名です。（TEL 047-357-2943）



#### 六 神輿店 ①中台神輿 ②後藤神輿 ③浅子神輿跡

行徳の神輿は非常に有名で、日本全国に納められています。江戸中期頃から行徳で作られた堅牢な神輿が有名になり、神輿づくりが盛んになりました。神輿は古くは仏教彫刻を生業とする仏師たちによって造られたといい、港町でお寺が多かった行徳に仏師が住みつき、神輿づくりが始まったのではないかとされています。現在は、中台製作所が神輿の製造から販売まで唯一手掛けています。



後藤神輿の店舗壁面に残る彫物

#### 七 常夜灯と旧江戸川

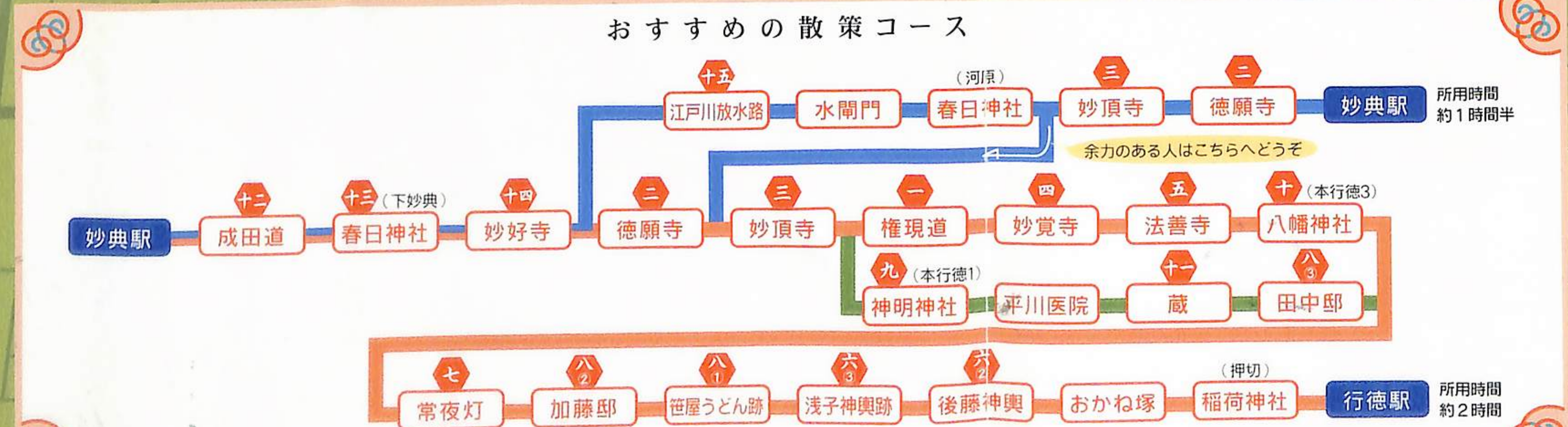
塩の産地である行徳では、江戸へ塩を運ぶために水運が発達しました。本行徳と江戸を往復する船は「行徳船（ぎょうとくぶね）」と呼ばれ、やがて人や物資の輸送にも使われるようになりました。江戸時代には成田山参詣客も利用するようになり、1812年、講中と呼ばれる信者が、航路の安全祈願のため高さ4.3mの常夜灯を建てました。平成21年に、常夜灯周辺は常夜灯公園として整備されました。







- トイレの利用ができます
- バス停
- スーパーマーケット
- コンビニエンスストア
- 歩道橋



### 八 旧家

行徳街道沿いには、見た目も見事な歴史的建造物がいくつもあります。船でも陸路でも、立ち寄らない人はいなかったと言われる「笹屋うどん」跡、塩問屋の「加藤邸」、元行徳町長宅「田中邸」など、製塩業で繁栄がもたらされた行徳の姿が偲ばれます。これらの旧家は、行徳の歴史を伝える良好な景観づくりとして「市川市景観賞」を受賞しています。(写真:「笹屋うどん」跡)



### 九 神明(豊受)神社 (本行徳1丁目)

この神社は「行徳さま」と呼ばれた山伏金海法印が、伊勢神宮を勧請して建てたのが始まりと言われ、本行徳1丁目から4丁目、および本塩の総鎮守にあたります。白装束の担ぎ手と独特のもみ方、総重量500kgにおよぶ神輿で有名な「五ヶ町祭礼」は神明(豊受)神社の大祭であり、3年に一度の開催です。境内には村の力もちが持ち上げたという五拾五貫(約206kg)の力石もあります。



### 十 八幡神社 (本行徳3丁目)

本行徳3丁目の鎮守。天正元年(1573年)、相模国鎌倉(神奈川県)の八幡神社を勧請して建てたのが始まりと言われ、五ヶ町祭礼では、3丁目渡御の舞台になります。境内には天満天神の碑や68貫目(255kg)の力石があり、明治時代の力士の銘が刻まれています。また、江戸名所図会にも描かれている大イチョウ2本が市川市の保存樹に指定されています。



### 十一 蔵

行徳街道沿いには、レンガ造りの大きな蔵が点在しています。往時の繁栄を偲ばせるこれらの蔵は、米などの食料貯蔵に利用されていたようです。



### 十二 成田道

成田道(成田街道)は、江戸時代に成田山参詣ルートとして利用された全長約63kmの街道です。ルートは諸説ありますが、陸路:新宿(にいじゅく)-小岩、または水路:日本橋小網町-行徳、市川八幡-船橋-大和田-白井-佐倉-酒々井(しすい)-成田と言われています。



### 十三 春日神社 (妙典3丁目)

春日神社の創建は、境内の灯籠に寛文10年(1671年)とあることから、それ以前の建立ではないかと考えられています。この神社では、3年に1回、10月に町内の家内安全・五穀豊穡・学業成就を願う大祭が行われています。この大祭では、雌雄2頭の獅子頭を1頭につき14名の担ぎ手が担ぎ、町内を廻ります。獅子頭の作者は、一説によると行徳で有名な後藤神輿店後藤直光であると伝えられています。



### 十四 妙好寺

永禄8年(1565年)篠田雅楽助清久の支援によって、日宣法印を開山に迎え創建された日蓮宗のお寺。山門は建築様式や文様が江戸中期の特色を示しており、貴重な建造物です。市は、昭和43年(1968年)2月に有形文化財に指定し、平成9年3月には修復工事を行いました。(TEL 047-357-3304)



### 十五 江戸川放水路

洪水を防ぐため、大正8年(1919年)に江戸川放水路が完成しました。現在は放水路を江戸川本流とし、もとの流れは旧江戸川と呼ばれています。その後放水路で分断された行徳と八幡を結ぶ行徳橋が架けられ、更に昭和18年(1943年)に江戸川水閘門が、昭和32年(1957年)には行徳可動堰が設けられました。堰(せき)周辺は絶滅危惧種ヒメイトトンボの生息地でもあり、豊かな自然が残っています。



参考文献: 『開行徳の歴史大事典(鈴木和明著)』/ 『市川の自然(市川市発行)』/ 『市川の歴史(市川市教育委員会)』